

綿毛はどこへ

東京都北区飛鳥中学校
本田大輔

令和7年3月22日（土）東京都北区立飛鳥中学校にて『第1回英語教育飛鳥の会』が開催されました。その会の最後、私（本田）は、次のように参加者に投げかけて会を終えました。

「次はみなさんが発表する番です。」

私たちがしたいのは「点」の研修ではありません。
学びと学びがつながっていく「線」の研修です。
人と人とが繋がっていく「線」の研修です。
出会いと出会いが新たなものを作り出す「面」の研修です。



中嶋先生から渡されたバトンを、たんぽぽの綿毛のように、
日本中に飛ばしていきたいのです。

① 「えっ！？これはすごいですよ。」

飛鳥の会を参観されていた（株）インタラックの社員の方が言葉を失っていた出来事があります。その方は休み時間に、受付に行き、名簿をじーっと見つめておられました。そして、「えっ！？これはすごいですよ。」とつぶやかれたのです。

驚かれていたのは当日欠席の「少なさ」でした。

普通（これが普通ではいけないと思うのですが）の研修ですと、当日欠席される方が「2割」から、多いと「3割」いらっしゃるのだそうです。オンラインセミナーだとなおさらその割合が多いとお聞きしました。

しかし、嬉しいことに、飛鳥の会は当日欠席がほんの数名でした。欠席された先生からもメールが届き、無断で休まれた方はいらっしゃいませんでした。

名簿の○印（出席）を見て、その社員の方は「信じられません」とおっしゃっていました。

一緒に会を運営してくれた高杉先生が次のように私を労ってくださいました。

「大変だったかもしれないけれど、本田さんが一人ずつ参加者とメールで繋がったことが良かったんだと思うよ。グーグルフォームで自動的に、機械的にやっていたら欠席者は多くなったんじゃないかな。」

たしかに40名を超える参加者とメールで一人ずつやり取りをするのは大変でした。

しかし、中嶋先生から学んだ「スピードは誠意」そして「人と人とのつながり（ヒューマン・ネットワーク）」こそが大事、と信じて行動したことが参加者の心に響いたのだと思います。

AIはたしかに便利ですが、愛がありません。

人と人を繋ぐのは、人です。

想いと想いを紡ぐのは、ことばです。

それを形にするのが行動です。

これを学級経営や学年経営、保護者対応に例えるとどうなるでしょうか。

それは生徒一人ひとりに手間暇をかけることを厭わない、ということです。温かい眼差しや最後まで待ち続ける姿勢のことです。提出物をハンコ一つで終わらせるのではなく、朱書きのコメントを入れる、ということです。

保護者への連絡は何か悪いことがあったときではなく、良いときにも1本電話連絡をする、ということです。また、保護者が何か訴えてきたら、その日のうちに即座に対応する、ということです。

その手間暇を惜しんではならないと教えてくださった中嶋先生にあらためて感謝いたします。

② 「楽しいからできる」

今回、私たち飛鳥の会は、一つのコンセプトに集いました。

「自分たちがワクワクすることをやろうよ」

自分たちがワクワクして、それが誰かのお役に立てるのであれば最高に幸せだ、という考えです。いつかは「利他」の精神が自分の中に宿ることを目指してはいますが、利他と言えるほどの人格を兼ね備えているとは言えません。そこでみんなが合意したのが、「自分が心底楽しいと思えることをやろうよ。自分たちがワクワクすること、それが誰かを助け、誰かの役に立てるなら、それが利他なんじゃないだろうか。まずはそこから始めようよ。」というものでした。

実際、登壇した先生方は準備に時間をかけ、直前まで修正を図っておられました。参加者

のために誠心誠意尽くして向かい合うことを目指したのです。

高杉先生は持ち前の「遊び心」を発揮し、当日の気温が高かったことを逆にとり、文法導入の自然さと必然性に結び付けておられました。宮崎先生（令和7年度の都英研・研究授業者）は23年間磨き上げられたオーラル・アプローチの手法を惜しげもなく参加者に分かり伝えてくださいました。

なにより、それぞれの講師が自分の講座で「長所発揮」をし、そして全員が次の方へバトンを繋ぐのだという意思をもっていました。

誰もが「みなさんだったらどうなさいますか？」「こんなやり方もありますよ。でも根っこの考え方はなんだと思いますか？」と問いかけながら講座を展開してくれました。

山内先生はリテリングについて発表されましたが、リテリングを通して育てたい生徒像を次のように語っておられました。

「他者のことばを受け止めて、そこに自分のことばをつなげる人になってほしいんです。」

また、風見先生は中間指導について発表されました。そこでも「付けたい力」について次のように述べてくださいました。

「仲間の取り組みから学び、自分と比較しながら、粘り強く自分と向き合える力をつけたいんです。」

そして松山先生は学習指導要領について発表されました。そこでは「人格の完成」を目指し、なんと幼稚園の学習指導要領から読み解いた発表が展開されました。

「ところで、みなさん。この言葉の定義はご存じですか。」

どの講座でも、最後に参加者をハッとさせる落としどころを用意していました。単なる指導技術、指導法を伝える会ではなく、その根底に流れるものに気づいてほしいと考えたからです。

どれもこれも中嶋先生から学んだことです。それが「知識」として身に付いたのだけでなく、「技能」として身に付いていることがよくわかりました。

これも授業に例えるとどうなるでしょうか。

それは、生徒一人ひとりが「できるようになったかどうか」をアウトプットさせる場がなければ、その力を測ることはできないということです。そういう場があるから、自分の力を最大限に伸ばすことができる、ということです。

中嶋先生がHPの「発表会」のないピアノ教室では上手にならない、でお示くださっているように、発表会が1ヶ月後にあり、ステージ上で演奏しなければならないという状況を（無理なく）準備する必要があるということです。

③ 研修も Live Jazz で♪

研修で参加者のみなさんに伝えたかったことは「情報」（指導技術）だけではありませんでした。もちろん具体的で効果的な指導方法を伝えることは重要です。それがなければ人は集まってきません。

しかし、その中身を伝えるときの**私たちのやり取り**にも注目してほしいと願っていました。

私たち登壇者が気をつけたことは次の通りです。

- 伝えたいことを徹底的に絞る（引き算思考）
- 問いかけてから**間をとる**（個で考える時間）
- 個で考えた後、ペアで話し合う（価値観偏差）
- 個の発言に対して教師がコメントする（価値づけ、意味づけ、フォロー）
- 最後は教師が**ストンと落とす**
- **伏線**を張る or **余韻**を残す終わり方
- 各講師陣が次に**バトン**をつないでいくリレー方式

これらはまさに「Live Jazz」です。その時、その場にいる参加者として作り上げるのでできない一回きりの「授業」です。

参加者の中で、カレーが大好きな方がいたこと、昨年度大変荒れた学年を担当した新卒1年目の先生がいたこと、そして給食時にお皿が割れたらどうするか手順を完璧に決めている先生がいたこと、研修テーマに関連した参観者の発言を活かしながら、まわりを巻き込んで講座を展開しました。

予定調和で進めるのではなく、**参加者と言葉を紡ぐ喜び**がそこにありました。スライドを一方的に見せるのではなく、**間やゆとりを楽しんで、参加者の「知りたい」が高まるまで待つ**ことができました。



4 研修までの準備

研修に向け、登壇者は次のような準備をしました。

- ① マンダラートで構想を練る。
- ② マッピングで情報を整理する。
- ③ それらを何回か繰り返し、情報を精査・吟味する。
- ④ 情報カードや箱書き等の思考ツールで「起承転結」をつくる
- ⑤ スライドを作成する。
- ⑥ プレゼンの練習を個人で行う。
- ⑦ 1週間前に中間発表を行う。
- ⑧ お互いに指摘し合い、学び合い、自己調整をする。
- ⑨ 当日までさらに練習をする。
- ⑩ 当日も前の登壇者や参加者を見て、最後まで修正する。

ポイントとなる場面が3つありました。

一つ目は、①から⑥までの事前準備を登壇者がしっかり行ったことです。⑤のスライド作成から始めた登壇者は一人もおりませんでした。一つの講座に与えられた時間はわずか20分でしたから、**引き算思考**でエッセンスを凝縮する必要がありました。スライドから作成し始めていたら、足し算思考で、あれもこれもと欲張ったはずです。

しかし、思考ツールを活用し、情報を拡散・収束させたのち、さらに精査（細かな点まで調べる）・吟味（よく調べ、良いものを選ぶ）まで行ってスライド作りを行っていました。このような準備を“**当たり前**”と考える同志がいることを心から誇りに思えました。

二つ目は、やはり「中間発表」です。大事なのは「中間発表をしたこと」ではなく「**中間発表後のコメントの質**」です。

我々には2年前ビブリオバトル（中嶋先生の著書『授業デザイン力を高める3つの力』を紹介するレポートを書く）で培った経験がありました。そのため、「**観点**」をもってそれぞれのプレゼンを評価することができたのです。

「そこは**自己開示**から始めたほうが聞き手は安心するんじゃないか。」

「before after になるように**順番を入れ替えた**ほうがいい。」

「どんどん先に進まず、**問いかけて参加者とやり取り**した方がいいね。」

「これでも情報量多すぎるから、**バッサリ引き算**しよう。」

お互いへの信頼関係も構築されていますので、何の遠慮もなく言い合えます。したがって時間を無駄にすることはありませんでした。

三つ目は、⑩の最後まで修正する、ということです。当日の参加者の様子、経験値を見て、どの登壇者も最後まで修正を重ねていました。

中嶋先生がしてくださっていたように、スライドの順番を入れ替えていた方もいました。複数のバージョンを用意しておいて、参加者のニーズに合わせて使用するスライドを決めている方もおられました。そういったことが当たり前に行われ、当然だと思っている同志がすぐそばにいました。

⑤ 参加者の感想から見えること

参加者はどのような感想をもったのでしょうか。その言葉の中に、今後の方向性が見えてくるように思います。

英語の能力だけでなく、人として身に付けてもらいたい
力をスピーチの前後に一言、二言入れるだけでも、配慮の
いきる、思いやりのある生徒の育成に繋がることに感銘を
受けました。ゴールの活動を考える中で、付けた力と
育った姿を具体的にし、その力を身につけるために必要な
手順を考えて、説明の付くものにしたいと考えました。

英語の授業の型や技術については、これまでも

勉強する機会がありました。

学級経営について学ぶ機会はいまほとんどなかったの

今日本田先生のお話が聞いてよかったです。

生徒が話を聞かなくても、授業が良ければ解決

できると思って努力してきたけど、うまくいかなかったのだ。

「生徒の育った姿」「つけたいか」から逆算することで下切りのほら頭では分かってはいるんですけど、けちく 教科書をあつかう授業にのびてしまっています。
「単元最後の活動で生徒に書いて（話して）ほしい原案を教師が作成する」というのが印象的でした。紹介にくださった中1
1学期の「Show & Tell」でもただ話すだけではなく、生徒を育てる工夫（前の生徒の話をした内容＋コメント）を私もできるように耳をこらしてみたいと感じました。
また言語活動の背景にある集団づくり 学級づくりについて、
「小さなことに気づける」「みとめられる」教師に7077を170と書いて。

私は、プランクが長く空いた後の英語教育現場なので、
ひとつでもふたつでも何かをかせればと思ひ参加させていたがきいた。
英語教育に関しては今日学んだこと、自分なりにわくわく勉強して
いくしかないと覚悟を決めました。学習指導要領もきちんと読みかき
日時間もとりのす。
本日の先生の学級づくりのお話 かげても、心に響きました。英語の授業でも
開き手話しに面談する姿勢を 一貫して指導されている点、英語の
授業でも 生徒を育てるという視点をもっている（そののが大変参考
になりました。

参加者の多くが「学級経営」（集団づくり）の重要性に気づかれたようでした。指導技術や指導の型について教わる機会があっても、子どもを育て・鍛えていく視点や学習集団を育て高めていく考え方を知る機会がそもそもなかった方もいたようでした。こういった声の中に、私たちが進むべき方向性が垣間見えたような気がいたします。

また、次のような声もありました。

今回は時間が足りなかった。もっと具体的な指導方法も聞いてみたい。

そして東京都所属の先生からあがったのは、

少人数の運営方法に困っている。どうにかしたい…

というものでした。

みなさんからの声を受け、そして私たちが学んだことを生かす Our Action Plan を以下のように設定いたします。

- | |
|---|
| ① 学習集団づくりを軸にした英語教育
② 具体的な指導方法とその哲学
③ 教師集団を“チーム”に！ |
|---|

学習集団や学級づくりを主軸にした英語教育をどのように展開していけばいいのか、英語指導法に限定せずにみなさんにお伝えしていければと考えています。さらに、具体的な指導方法をお伝えすると同時に、その背後にある理念に気づいていただけるようにしていきます。

最後に、英語科に限らず、教師を“チーム”（互恵的な関係を築く）にするには自分自身がどう在ればいいのか、利他の精神を高めていきたいです。

⑤ 「仲間を信じる。自分を信じる。」

これは中嶋先生からいただいた言葉です。

令和7年3月22日(土)は、中嶋塾 2023@東京を卒業してからちょうど1年後でした。

英語教育飛鳥の会は、一人ではできませんでした。私のまわりには今、「一緒に」行動してくれる同志がいます。しかも「全国に」です。そのつながりを中嶋先生がつくってくださいました。

自分の手を、腕を組んで自らを守るために使うのではなく、その手を広げ、誰かとつながるために伸ばしていきます。

目先の利益や指導技術に囚われるのではなく、深く根を張り、どっしりと太い幹を育てる研修を続けていきます。

今後3年間、地道に活動を続け、その後「線の研修」ができるよう、たんぽぽの綿毛をさらに遠くまで飛ばせるよう、自分たちに力をつけていきます。

中嶋先生、今後も私たちを見守っててください。

